

公立大学法人金沢美術工芸大学
平成29年度業務実績報告書
論点整理表

金沢市公立大学法人評価委員会

〔質問・意見等〕

「Ⅳ」が大幅に増加しているが、そのことに対する美大の見解は。

※Ⅳの評価にするとすることは、年度計画に比べ実施内容が格段にあがり、そこに教員の業務の負担や審議時間など実績に見合った努力が行われていることが必要である。Ⅳがこれほどまでに多いということは、年度計画の設定が適切ではなかったのではないか？（計画のハードルが低すぎたということはないか。No.60～63及び80は、年度計画を細目化しすぎたのではないか。）



〔回答〕

○年度計画の策定にあたっては、教育研究審議会で議論を重ね決定していることであり、また外部委員も加わった理事会、経営審議会でも議案として委員の皆様にお諮りをし、承認を得ているものである。こうしたことから、計画の策定段階においてはその設定レベルは適切であり、ハードルが低すぎたのではないかとのご指摘は当てはまらないと考えている。なお、平成30年度の計画策定にあたっては、より求める基準が明確になるようにしたところである。

○また、No.60～63及び80は、年度計画を細目化しすぎたのではないかとご指摘を受けているが、これらの項目は特に金沢市をはじめとする地域文化の振興に関するものであり、本学の社会的な役割として、ある程度の具体的な目標をもって取り組むことが有意義なことと考えている。

○結果的に昨年度と比較してⅣ評価が多くなったが、昨年度と比較しての相対評価ではなく、本学としてはそれぞれの目標項目に対して適切かつ真摯に取り組んだ結果であるとの認識である。

□ 項目別実施状況

大学の教育研究等の質の向上に関する目標（教育に関する目標）
 (1) 教育内容及び教育の成果等に関する目標

中期目標	ア 学士課程教育にあつては、学部の教育目標及び各科・専攻の教育方針に基づき、教養教育と専門教育を行い、学位授与方針に定める汎用的な教養と専門的な造形力を修めた職業人を育成するとともに、学部を本学の教育拠点と位置づける。
------	---

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
<p>(ア) 学士課程教育を、本学の教育拠点として位置づけ、学部の教育目標及び各科・専攻の教育方針に基づき、これに相応しい教育を実践する。</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>【質問・意見等】 大学・学部の目標、教育目標と3つのポリシーの関連性、3つのポリシー間の整合性について、どう不断に検証しているのか。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>【回答】 大学・学部の目標及び教育目標を念頭に置きつつ、学位授与方針の達成のために、教務委員会において教育課程の編成方針、入試委員会においては学生の受入方針について協議し、これらの関連性や整合性を確認すると共に、各科・専攻においても実施状況の把握・検証を行うことで、翌年度以降の取り組みに向けての具現化策を検討している。</p> </div>	<p>(ア) 大学及び学部の目標、教育目標、3つのポリシー等の関連性について不断に検証する。</p>	<p>○本学は、「芸術が社会に果たす役割を自ら探し行動する人材」（大学憲章）を育成することを社会から負託された使命であると考へ、「学位授与方針(ディプロマポリシー)」「教育課程の編成方針(カリキュラムポリシー)」「学生の受入方針(アドミッションポリシー)」を定めている。学士課程においては、教育目標、及び各科・専攻の教育方針に基づく教育を実践するために、3つのポリシーの関連性について教務委員会で協議を重ね、入試委員会では28年度に引き続き一般選抜入試と推薦入試終了後の専攻アンケートを基に検証を行い、入試方法との整合性の確認を行った。</p> <p>○特に29年度には、今後の一貫制博士課程等の大学院改革を見据え、大学全体としてディプロマポリシーを達成するため、カリキュラムポリシーの具体化を教務委員会と大学院運営委員会の双方において協議する中で、学力を保証する視点から単位認定の在り方を検討し、30年度4月入学者より変更することを決定した。具体的には、29年度以前の入学者は単位認定の最低到達点を50点としていたが、30年度入学者より最低到達点を60点とし、併せて、30年度以降の入学者の成績評価は、特に秀でた100点から90点の場合、成績表に「S」の表記をすることとした。</p> <p>○また、ディプロマポリシーに掲げる、「1. 本学における教養教育と専門教育を通して、知的活動はもとより社会生活においても必要となるコミュニケーション能力、論理的思考力、情報リテラシーその他汎用的技能を修得した」という学習成果の達成のため、一般教育科目における外国語科目「英語（四）」で、達成目標とそのための学習プランを受講学生が自ら決めるアクティブラーニングの要素を取り入れた内容とするなど、英語教育の充実に取り組み、更に30年度には、美術科芸術学専攻対象の「専門語学（英語）」やデザイン科対象の「専門英語演習」に加えて、新たに工芸科にも「専門英語演習」を開講することを決定した。</p>	III		<p>資料1-1 資料1-2 資料1-3 資料1-4 資料1-5</p>

□ 項目別実施状況

大学の教育研究等の質の向上に関する目標（教育に関する目標）
 (1) 教育内容及び教育の成果等に関する目標

中期目標 ア 学士課程教育にあつては、学部の教育目標及び各科・専攻の教育方針に基づき、教養教育と専門教育を行い、学位授与方針に定める汎用的な教養と専門的な造形力を修めた職業人を育成するとともに、学部を本学の教育拠点と位置づける。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(ウ) 専攻科目においては、各分野に要求される基礎的な造形力の向上、充実を図る。	(カ) 金沢近隣の地元作家を招聘して講演会や実技指導を行い、また近隣の工房見学・体験等を実施する。	○美術科日本画専攻では裏千家大島宗翠氏による茶道の授業を通して日本文化の理解を図った。美術科彫刻専攻では加賀市山中の木彫家宮本志野氏の実技指導を受けた。工芸科では陶磁の武腰潤氏（九谷焼絵付け技法）、漆・木工の山岸一男氏（沈金技法）、金工の宮崎匠氏（惣型技法）をはじめ、金沢近隣の10名を超える作家を招聘し実技指導を受けた。大学院美術工芸研究科デザイン専攻ファッションデザインコースでは小松市の（株）山本絹織（生地メーカー）に赴き、レクチャーを受け多くの生地サンプルについて学んだ。参加学生は一流の技術や基礎技法の大切さを学ぶとともに体験を通して視野を広げる事が出来た。	Ⅲ		資料5

6

〔質問・意見等〕

中期計画が「専攻科目においては、各分野に…」となっているので、デザイン科の実施状況（ない場合も含む）について、業務実績を記載してほしい。



〔回答〕

デザイン科では、実技指導を中心に国枝千晶氏によるシルクスクリーン演習、稲垣陽平氏による製品計画論、村上彰彦氏による屋内計画論を実施するなど多種多様な時代のニーズに合った指導を積極的に取り入れている。
 今回の年度計画においては、近隣の地元作家の招聘が項目として表記されており、デザイン分野における表記は割愛したものである。

□ 項目別実施状況

大学の教育研究等の質の向上に関する目標（教育に関する目標）
 (1) 教育内容及び教育の成果等に関する目標

中期目標

イ 大学院教育にあつては、造形芸術に関する高度な理論、技術及び応用を研究教授し、芸術の多様な領域で横断的に活躍できる高度専門職業人を育成するとともに、大学院を本学の研究拠点と位置づける。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(イ) 研究拠点としての大学院に相応しい、実技、理論における多様で横断的な教育研究の場を設け、学習需要に対応する教育研究の展開と連関を図る。	(イ) 金沢21世紀美術館へ大学院生をインターンとして送り出し、実践的な教育の機会とする。	○28年度の2名と比較し、29年度は、5名の大学院生をインターンとして金沢21世紀美術館に送り出した。研修内容は、油画修士1年生と芸術学修士1年生の2名が、展覧会ローカルテキスタイル「To&Fro」のアシスタントとして研修した。同じく、芸術学修士1年生が、コレクション展3「見る」ことの冒険展のアシスタントとして研修した。更に、工芸修士1年生が、展覧会「自治区」のアシスタントとして、同じく工芸修士1年生が、コミッションワークのメンテナンス及び展示収蔵作品の環境保全について研修した。 ○また、金沢市内小学4年生児童招待プログラムである「ミュージアム・クルーズ」に、工芸修士1年生、油画修士1年生、芸術学1年生の3名が、アシスタントとして参加し、実践的な教育の機会とした。	IV		資料19

16

〔質問・意見等〕

実施状況は年度計画の範囲であると思われる(Ⅲではないか)。何故評価がⅣなのかを説明してほしい。



〔回答〕

インターンの数が2名から5名(1学年37名の内)に増えたことに加え、当初の計画には無かった学生の自主性に基づく「ミュージアム・クルーズ」へのアシスタントとして3名の学生の参加が新たに行われたため、Ⅳ評価とした。この内、インターンについては、28年度の経験者による報告会を大学独自で開催し、29年度の参加に向けた理解と意欲の向上に努めた成果である。なお、インターン生の中には台湾からの留学生も参加したところである。

□ 項目別実施状況

大学の教育研究等の質の向上に関する目標（教育に関する目標）
 (1) 教育内容及び教育の成果等に関する目標

中期目標

ウ 定められた学位授与基準、学位審査基準、成績評価基準を厳正に適用し、また不断に検証することによって、芸術系大学に相応しい教育の成果の測定指標を作成し、教育の質を保証する。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(7) 成績評価システムの総合的な検証を行い、公平性、透明性、厳格性が担保された成績評価を行うとともに、その検証システムを実質的に機能させる。	(7) 引き続き、教務委員会を中心に、シラバスの研究と見直しに努める。	○29年度第5回教務委員会において、他の国公立芸術系大学や地元国立大学の成績評価基準とそのシラバス表記の状況を研究し、大学院運営委員会と連携をとりながら「成績評価欄」の評価基準（A～C）の適合性を検証した。この結果、学力保障の観点から30年度以降入学生から単位認定の最低到達点を50点から60点に変更した。 ○加えて、認定基準の変更に伴い、学修成果を適正に反映させるため評価を、従来のA、B、C表記からS、A、B、Cの4段階に改め、30年度シラバスに新たに明記することとした。	Ⅲ Ⅳ		資料1-5

21

〔質問・意見等〕

説明された実施状況は年度計画の範囲であると思われる（Ⅲではないか）。

- ・より実質的に、「シラバス記載の充実」、「15回又は30回の授業概要の明確な表記」等がなされる等、各シラバスの内容がすべて、一定のレベルを保持しており、ばらつきがない
 - ・シラバス内容のチェックと改善を求める組織的体制・取組が企画されている
- といった点の改善があれば、Ⅳの評価に値すると考える。



〔回答〕

単位認定の最低到達点を50点から60点に変更したことや、成績評価を従来のA、B、C表記からS、A、B、C表記に改めたことは、長年議論されなかなか実現されなかったことであったが、開学以来、初めて実現にこぎつけたことは大いに評価に値するとの認識からⅣとしたが、年度計画の範囲であるとのこと指摘に従いⅢに改める。

大学の教育研究等の質の向上に関する目標（教育に関する目標）
 (3) 学生への支援に関する目標

中期目標 ア 学習支援体制を検証し、学部教育と大学院教育のそれぞれに相応しい学習支援体制を構築する。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(7) 授業科目の履修に関する総合的な相談・支援体制を検証し、さらなる活用を進める。	(ウ) 大学生活全般に関する相談指導に学生相談室で積極的に応じる。	<p>○29年度入学生から、入学手続き時に、入学後の相談体制、障害学生への特別な配慮についての可能性を通知する資料を同封した。また、入学者に対してアンケートを実施し、入学後の授業等での支援ができるようにした。</p> <p>○学生支援委員会と教務委員会との合同委員会の話し合いから、教員が学生を支援するために学生相談室を利用しやすくするためのマニュアルを作ることを検討し、教職員向けのリーフレットを新たに作成した。</p> <p>○学生相談室への来談者の話を丁寧に聞き、学生の相談内容を必要に応じて教職員に伝えたことで、学生が教職員から履修上の協力を得やすくなった。</p>	IV		資料37 資料38 資料39

37

〔質問・意見等〕

実施状況は年度計画の範囲内とも取れる。何故、評価がIVなのかを説明してほしい。



〔回答〕

入学手続き時における、入学後の相談体制、障害学生への特別な配慮についての可能性を通知する資料の同封や、入学者に対してのアンケートは年度計画の範囲であるが、学生相談室内での取り組みだけではなく、学生相談室の利用促進に向けて、学生支援委員会と教務委員会との合同委員会の話し合いからその必要性を認識し、新たに作成した教職員向けのリーフレットは年度計画外のことであることからIV評価とした。

大学の教育研究等の質の向上に関する目標（教育に関する目標）
 (3) 学生への支援に関する目標

中期目標 ア 学習支援体制を検証し、学部教育と大学院教育のそれぞれに相応しい学習支援体制を構築する。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(イ) 授業科目以外の課外、学外の活動に関する支援体制を検証し、充実を図る。	(オ) 個展、グループ展等の自主的な学外発表活動を支援・奨励する。	○学生の個展・グループ展の開催については、57件に学生展等開催交付金を交付した。また、公募展出品については、42件に公募展出品等事業補助金を交付することで学生の自主的な学外発表活動に対する支援を行った。 ○特に、有志の学生および教員らで結成し、大学として奥能登国際芸術祭に参加したプロジェクトチーム「スズプロ」の活動は、芸術祭期間中の作品観覧来場者数が全体の2番目の集客数となり、美大が持つ美術の力をおおいにアピールすることができた。	IV		資料27 資料33

39

〔質問・意見等〕
 「～学習支援体制を構築する。」という中期目標を達成するための年度計画であるため、どういった「支援・奨励」により『スズプロ』の活動が大きな成果を上げたのかの記述してほしい。（『スズプロ』の活動が特筆すべきものであることは認めるが。）



〔回答〕
 『スズプロ』の活動の成功に向けて、学生の自主的な取り組みに対し、平成29年度は予算を500万円計上すると共に、完成した作品だけの紹介ではなく、構想から準備、制作活動に至るまでのドキュメンタリー番組を制作し、地元のテレビ放送局を通してPRするなど、金銭面のみならず大学としての後方支援も行った。

大学の教育研究等の質の向上に関する目標（教育に関する目標）
 (3) 学生への支援に関する目標

中期目標 イ メンタルヘルスを含む健康管理支援体制及び生活支援体制を継続的に検証し、充実させる。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(ウ) 大学独自の奨学金制度や学生顕彰制度を充実させ、効果的な学生支援を推進する。	(カ) 大学独自の褒賞制度の充実を図る。	○「KANABIクリエイティブ賞」として、公募展・コンクールで優れた評価を得た学生、創造的でめざましい活躍をした学生やグループ、卒業・修了制作展での優秀者を、「けやき賞」として、学部1～3年生の独創的な活動を、卒業式終了後に表彰した。受賞者選考にあたっては、教授会での周知、学内各専攻掲示板を活用し、全学的な情報発信を実施した。 ○加えて、28年度まで、学内のエントランスホールにおいて行っていた「KANABIクリエイティブ賞」および「けやき賞」の受賞式を、29年度より、収容人員の多い美大ホールに変更した。これにより、保護者にも学生が表彰される姿をステージ上で晴れやかに見せることで、褒賞制度の付加価値を高めることが実施できた。	Ⅲ Ⅳ		資料30 46

〔質問・意見等〕
 説明された実施状況は年度計画の範囲であると思われる(Ⅲではないか)。
 (年度計画に「充実を図る。」とあり、実績は「充実」させた内容なので、計画どおりではないか。)



〔回答〕
 毎年学内の基金を用いて褒賞制度を行っているが、厳しい予算環境の中で独自の予算を用いて実施を継続していることは十分に充実を図っていると自負している。これに加えて、褒賞制度の付加価値を高めるために、当初の開催予定場所であったエントランスホールから保護者が集まる美大ホールに変更したことは、検討を重ねた上で決定したことであり、Ⅳ評価に値すると考えていたが、年度計画の範囲であるという指摘を踏まえⅢに変更する。

大学の教育研究等の質の向上に関する目標（研究に関する目標）
 (2) 研究実施体制等に関する目標

中期目標 イ 研究の質を向上させるため、研究の方法や内容・成果に対する評価体制について不断に見直す。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(7) 研究方法、内容、成果に対する点検・評価方法を検討し、評価の結果を研究方法等の改善に役立てる仕組みを構築する。	(7) 大学における研究活動を新たに開発し、また研究成果に対する点検・評価方法の整備に取り組む。	<p>○大学における研究活動の新たな取り組みとして、29年度に開催された奥能登国際芸術祭に本学教員及び学生が参加した。大学として、芸術祭に参加したプロジェクトチーム「スズプロ」の活動は、芸術祭期間中の作品観覧来場者数が全体の2番目の集客数となり、美大の持つ美術の力をおおいにアピールすることができたことで、美大に対する高い評価を得た。</p> <p>○その結果をふまえ、引き続きスズプロの作品である「奥能登曼荼羅」について、主催者である珠洲市が保存していくことを決定しており、学内で協議した結果、保存・活用に協力することとした。</p> <p>○また、研究成果に対する点検・評価方法の整備としては、教員が教育研究、社会貢献、大学運営の項目の目標を設定し、教員自身による一次評価と学長による二次評価を行う教員評価制度を引き続き実施したが、加えて必要な際には、学長と教員が個別に協議を行う場を新たに設けたことで、多様な活動の推進に向けた研究環境の改善に努めた。</p>	Ⅲ		資料27

77

〔質問・意見等〕
 「教員評価制度」ではなく、「研究成果を対象とした点検・評価の仕組み」がどう整備されているのか示してほしい。



〔回答〕
 教育研究費審査会を4月20日に開催し、各教員から申請のあった研究内容について、教育研究審議会メンバーや事務局関係者、研究所担当者が、過去の研究活動に対する取り組みや成果を評価した上で、当該年度に記載してある金額や内容を精査し、研究活動に要する経費の採択や金額の配分を決定する仕組みとなっている。

業務運営の改善及び効率化に関する目標
 1 組織運営の改善に関する目標
 (2) 教育研究組織の見直しに関する目標

中期目標 特色ある教育研究を推進するとともに、学習に対する学生の需要や研究に対する社会の要請を検討し、教育研究組織について計画的な見直しを行う。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(7) 学部及び大学院について、科・専攻の編制、学生定数、教員定数等について不断の検証を行い、改善に努める。	(イ) 大学院の学生定員の増員、及び大学院再編に関する検討を行い、これを実施する。	<p>○大学院改革の方向性を踏まえ、30年3月の教育研究審議会において、30年度の計画を決定した。これにより、学習に対する学生の需要や研究に対する社会の要請を検討し、教育研究組織について、計画的な見直しを行うとともに、新キャンパスへの移転を見据えて、大学院の学生定員の増員、及び大学院再編に関する計画の策定に着手することとした。【再掲98】</p> <p>○この計画に関連して大学院内に新たに研究生制度をつくり、29年度中に募集も開始したことで、30年4月より、研究生7名を本学に受け入れることを決定した。</p> <p>○加えて、教育研究活動の質の保証・向上のために、新キャンパスへの移転と大学院改革を視野に入れた大学院専任教員制度の見直しを行うこととした。</p>	Ⅲ		資料18 99

〔質問・意見等〕
 「年度計画」は「実施」されなかったという理解で良いか。
 （簡単には実施できない案件であるため、実施されなかったとしてもⅢで良いが。）



〔回答〕
 ご指摘の通り、大学院学則上の入学定員・収容定員の変更は簡単には実施できない案件であり、それに代わる方策として、研究生制度による受け入れの拡充を図ったものである。この研究生制度を創設したことは、将来大学院生となる学生を育てる仕組み作りであり、評価の対象としてご理解いただきたい。

業務運営の改善及び効率化に関する目標
 1 組織運営の改善に関する目標
 (3) 人事制度の改善に関する目標

中期目標 ア 大学の特性に即した柔軟で弾力的な人事制度を運用することによって、大学運営や研究教育を効果的かつ効率的に推進する。また、教職員の研修制度の充実を図る。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(イ) 教育研究活動の質の向上のために、多様で柔軟な教員人事制度を検討する。	(ケ) 学芸員等の専門知識を有する職員を他大学等へ講師として派遣し、交流を図る。	○常勤学芸員を金沢学院大学へ非常勤講師として派遣し、科研費の研究分担者として他大学の研究者とともに研究活動に従事することで、学外専門家との交流を図った。 ○非常勤学芸員を12月9日に山梨県立美術館で開催された、特別企画展「狩野芳崖と四天王」記念シンポジウム「なぜ今、狩野四天王を評価するのか」に派遣し、本学所蔵作品に関わり近世・近代絵画の専門家との情報交換と交流を深めた。	Ⅲ		資料69-2 108

〔質問・意見等〕
 非常勤講師の委嘱は、通常、属人的になされるものと理解しているが、貴法人においては、組織的に対応しているのか。



〔回答〕
 通常、他大学からの非常勤講師の委嘱はその大学から教員や常勤学芸員に直接行われるものであるが、本学は現在、美術工芸研究所ギャラリーの博物館相当施設認定を目指しており、そのため常勤学芸員については「博物館学」教育の実績を積み、他大学の研究者と交流することを大学として奨励している。

業務運営の改善及び効率化に関する目標
2 事務等の効率化・合理化に関する目標

中期目標	法人の運営に資するため、事務等の適正な効率化及び合理化を行うとともに、労働環境の整備を図る。
------	--

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(7) 事務処理の効率化・合理化を進め、かつ労働環境の整備を図るために、不断の検証、改善を実施する。	(イ) 迅速な情報発信を進めるため、広報業務の一部を外部委託する。	○28年度より改訂を実施したホームページの内容修正等について、外部委託を継続することで業務を効率的に推進することができた。また、大学案内パンフレットのアートディレクションを外部委託することで、より質感の高まったものとなりPRの上で大きな効果を上げることができた。	Ⅲ		112

〔質問・意見等〕
「大学案内パンフレットのアートディレクションを外部委託することで、より質感の高まったものとなりPRの上で大きな効果を上げることができた。」 という実績は「Ⅳ」と評価しても良いと読み取れるが貴法人の見解はいかがか。



〔回答〕
大きな効果を上げることができたが、外部委託の内容は、28年度と比較して大規模なものではないことから、本学においてはⅢの評価とさせていただいた。しかしながら、評価をⅣとしていただければ、大変有り難いことであり謹んでお受けしたい。

財務内容の改善に関する目標

1 外部研究資金、寄附金その他の自己収入の増加に関する目標

中期目標

科学研究費補助金などの競争的研究資金、社会連携等による共同研究及び受託研究などの外部資金、寄附金等の獲得に積極的に取り組む。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(ウ) 大学の特性を活かした独自の自己収入増加策を検討し、企業等からの資金の導入に取り組む。	(イ) 社会連携事業による外部資金の獲得に努める。	○企業や地方公共団体からの依頼について、社会連携運営会議において内容と教育的な効果を確認し、産学連携事業を16件、地域連携事業を14件受託し、25,216千円の受託研究収入を計上するなど、当初見込の16,000千円を大幅に上回る収入を得た。	IV		資料7 117

〔追加資料依頼〕

外部資金の獲得について、過去3年くらいの年度目標値と実績値の比較表をお願いします。



〔回答〕

社会連携事業実績（いずれの年度も目標値は16,000千円）

平成28年度 21,470千円（産学連携18件、地域連携12件）

平成27年度 29,169千円（産学連携14件、地域連携11件）

平成26年度 25,285千円（産学連携15件、地域連携21件）

自己点検・評価及び情報の提供に関する目標
2 情報公開や情報発信等の推進に関する目標

中期目標

社会に対する説明責任を果たすため、積極的な情報公開を図る。また、大学の活動を広く社会に示すため、教育研究活動や大学の特色について、積極的な情報発信を行う。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(7) 広報実施体制と広報戦略を見直し、広報活動を強化する。	(7) 28年度の広報実施体制と広報戦略の見直しを踏まえ、引き続き、広報活動を強化する。	○28年度に広報戦略を協議して、29年度はその計画に従い進学相談会、高校や予備校への訪問、新聞広告などへの掲載、またホームページについても改定（卒業生作品集リニューアル、教員紹介ページ）を進め大学としての戦略を打ち出した。 ○特にオープンキャンパスでは、受験生からの要望を受けて在学生を前面に立てる計画を立案して実行した。さらに、学内の案内サインを含む環境整備にも取り組むことでこれまでの開催で最大の1,820人の参加者があった。	IV		資料73 131

〔質問・意見等〕

説明された実施状況は年度計画の範囲であると思われる(Ⅲではないか)。
(年度計画に「強化する。」とあり、実績は「強化」させた内容なので、計画どおりではないか。)



〔回答〕

これまでのオープンキャンパスは、各専攻間において個別に開催内容の見直しを行っていたが、29年度のオープンキャンパスにおいては運営そのものを学生主体に変更するという大規模な改革を実施した。また、この決定については広報運営会議が主体となり当初の計画にはなかったことであること、結果的にもこれまでの開催で最大の参加者となったことからIV評価とさせていただいた。